



インターン実習生・・・九州大学大学院統合新領域学府 オートモーティブサイエンス専攻
先端材料学分野、女性)

実施テーマ・・・・・・・・RO膜性能評価と運転圧力依存性の検証

受け入れ企業・・・・・・・・東レ株式会社 地球環境研究所

実施期間・・・・・・・・2015年9月7日～10月2日（1か月間）

■参加動機と事前準備

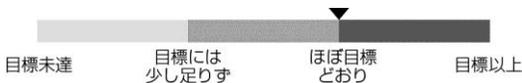
企業において現在の自分に出来ることは何か、出来ないことは何かを明確にしたいと思い、インターンシップに参加した。また、自分のコミュニケーション能力を社会で活かすためには、どうすれば良いかを学ぶことを目標にした。

事前準備としては、大学院で取り組んでいるテーマと相違する点や、企業の取り組まれている研究、製品について事前に予習を行った。

■実施後の自己評価

海水淡水化逆浸透膜の評価に従事した。他社膜との比較評価なども実施した。企業での研究である以上、利益という概念を切り離しての研究はできないと改めて感じた。評価に関しての様々な要件や企業努力について学習することが出来た。但し、業務をこなすことが精一杯になっており、新しい提案を出来なかったことが反省点であった。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

企業の安全意識の高さに初めは戸惑ったようだが、期間中安全のルールを遵守して無事故で実習を終えた。与えられたテーマの意図を的確に理解しながら実習に取り組んでもらえたことで、今後の研究・開発に役立つ新たな知見を得ることができた。

但し、今回は期間中に大型連休もあり、実質の期間が16日と短時間であったことから、作業になれ、自身で実験結果の考察が可能になったところに期間が終わってしまった。もう少し、期間が長いほうが好ましいと感じた。

■その他

【大学への要望】専攻でインターンシップが必修単位とされていないならば、このような制度を知ることなく学生生活を終えていたと思う。もっとインターンシップの機会が多くあることを周知してくれれば良いと感じた。

まとめ

専攻においてインターンシップが必修単位となっており、協議会のインターンシップを活用した。

実際に企業に行くことで自分の適性などをしっかりと考える機会となった。

インターン実習生・・・九州大学大学院総合理工学府 量子プロセス理工学専攻（男性）
実施テーマ・・・・・・・・高効率単結晶シリコン太陽電池セルの開発
受け入れ企業・・・・・・・・三菱電機株式会社 先端技術総合研究所（兵庫県尼崎市）
実施期間・・・・・・・・2015年10月1日～10月30日（1か月間）

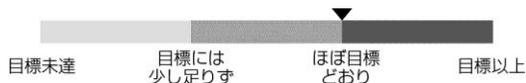
■参加動機と事前準備

研究の体制や安全に対する施策、新規事業に対するアプローチなどを経験・理解することを目標とした。また、積極的なコミュニケーションを取り、企業内研究者がどのような背景で、どのような研究に携わっているのかを学ぶとともに、当該領域の市場やトレンドについて知見を得ることを目指した。実習の内容に関しては事前に会議し、半導体の基礎知識および太陽電池の発電原理について学んだ。

■実施後の自己評価

単結晶シリコン太陽電池の研究開発における重要プロセスを満遍なく体験した。企業研究の特徴は、一つのプロジェクトに向かって、役割分担しながら一致団結して性能向上に取り組んでいる点である。この効率性を含めて、大学研究との相違点を感じた。技術革新の速い今日の世相に鑑み、博士課程学生は専門外の引き出しを増やすことが必要だと痛感させるものであった。反省点は、部外の優秀な経験者の方々と情報交換できなかったことである。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

学生の専門分野に関してプレゼンしてもらい、議論を交わすことで、研究の最前線の状況を知ることができたのは受け入れて良かった点である。定例MTGでの結果報告や、議論への参加などを通じて、チームでの研究を経験してもらった。企業における開発の方法論を知ってもらい、弊社の社風に触れ理解を深めてもらう良い機会となったように思う。学生も積極的に議論に加わってくれ、良い印象を受けた。ただ一点、1か月という時間的制約から独創性を発揮する機会は少なかつたかもしれず、今後の大学での研究に際して、意識してもらえることと思っている。

■その他

【後輩の方に】インターンシップは、職業適性や将来設計について考える機会になる。その結果、職業選択の主体性や職業意識を涵養するとともに、学習意欲も促してくれる、有益な取り組みとなる。積極的にインターンシップに参加されることを推奨する。

チームワークで研究を遂行することで生まれる効率性とスピード感に触れ、企業研究者が多様な専門性を持つことを知った。学生は専門外の引き出しを増やすことの重要性に思い至った。

大学での研究の最前線を知るとともに、企業風土に対する理解を深めてもらった点が、受け入れ企業にとって意義深いことだった。

職業選択や職業意識、学習意欲に繋がる機会だったと学生は感じている。

インターン実習生……九州大学大学院システム情報科学府 情報学専攻（男性、留学生）
 実施テーマ………新製品開発のサポート業務
 受け入れ企業………ローランド株式会社 松本事業所（長野県松本市）
 実施期間………2015年9月1日～9月30日（1か月間）

■参加動機と事前準備

企業の製品開発現場を体験し、製品開発の過程や方法、姿勢を学ぶとともに、開発業務に従事する職能適性があるかどうかを確認したいと思って参加した。ローランドを選んだのは、同社が数々の革新的製品を世に出してきたメーカーであり、その開発現場に興味があったからである。事前にローランドがどのような製品を製造しているのかを勉強し、週末を見越して松本市近郊の観光地を調べた。

■実施後の自己評価

ローランドの開発部で現場の技術者と仕事することで貴重な経験を得ることができた。主に音響製品やビデオ製品の検証とデバック作業を行い、その過程で幾つかの不具合も発見した。普段接しない業務用機器もあったが、使ってみるとどれも興味深く素晴らしい製品だったので、興味を持って仕事を続けることができた。多くの社員から製品開発時の苦労話を聞けたことは有益な財産で、この経験を通じて受け入れ企業への理解が深まった。

■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

外部から社内をみた場合の反応を得られたことは有益であった。今回学生が語学に堪能であるということで社内ではなかなか難しい多言語翻訳やチェックを担当頂けたのは良かった。また、学生が弊社の仕事に興味を持って作業してくれて、開発業務の大変さや面白さを経験してくれたことは、キャリアに関する視野を広げられたのではないかと感じられた。欲を言えば、学生が弊社開発業務に即した技術を持っていればよりお互いが成果を実感できるような作業を用意できたと思う。

改善点としては、1か月という短期間で、受け入れ側、インターン側双方にとって利益のある作業を用意することが難しく、また業務の都合と学生の希望をマッチさせることに困難を感じた点である。マッチング率と質向上のためにも、実施期間の需給バランスをとる仕組みの構築が必要と感じている。

■その他

【後輩の方に】インターンシップを希望する学生は、極力早期から準備を始めた方が良いでしょう。準備期間を長くすることで、企業理解はより一層深まると感じる。

学生にとって関心ある企業の開発現場を体験できたことは、多くの発見を伴うものであった。

企業にとっても、外部の視点を知るとともに、開発補助者として大きな戦力を得たと感じている。有効な保有技術があると尚良かった。

1か月と期間が短く、学生と企業のニーズの擦り合わせが難しいという意見は参考にすべき。

インターン実習生・・・九州大学大学院総合理工学府 量子プロセス理工学専攻（男性）
 実施テーマ・・・・・・・・ ナノカーボン材料の特性評価、製造プロセス検討
 受け入れ企業・・・・・・・・ 東レ株式会社 先端材料研究所（滋賀県大津市）
 実施期間・・・・・・・・ 2015年10月5日～11月27日（2か月間）

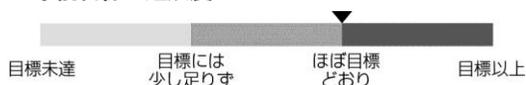
■参加動機と事前準備

企業と大学の研究開発の相違点を見つけ、今後研究を進める上での視野を広げること、グループの中で独創性を発揮することを目標に参加した。事前準備としては、受け入れ先の研究員の方と電話会議することで実習の目的を明確にし、また論文を読み込むことで初見の分野に対する理解を深めた。

■実施後の自己評価

慣れない作業、使用したことのない実験装置が殆どで、これらに慣れるのに多くの時間を割いた。当初目標とした独創性の発揮という目標はあまり達成できなかった。今からするともう少し積極的に臆さず提案すれば良かったと思う。他方で、様々な分野の研究がなされ、異分野間融合が積極的に行われていた研究所の雰囲気を感じて研究を進めることで、「研究開発の相違点の発見」という当初の目的の一つは達成した。具体的には、大学での研究が派生的アイデアも取り上げて検討材料とするのに対して、企業での研究では明確な目的のもと脇道にそれず研究されるという点である。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

弊社の安全に対する心構えを十分に理解し、事故や怪我なく実習期間を終了できたことが、最大の成果である。また2か月と短期間であったが、課題に対して前向きに取り組み、今後の方向性を決める結果を残してくれたことは大きい。真摯な姿勢は現場にとって刺激となり、指導担当者の経験にも繋がった。大学教員および学生と交流を深めることができたのも成果である。

課題としては、研修期間が限られていることである。中途半端な課題設定を避けある程度の結果を出すためには少なくとも3か月程度は必要と感じた。また懸念材料としては、今後学内の報告会等で秘密保持契約に抵触する事態が生じないかである。検討内容と結果の報告機会をもう少し準備できれば、「報連相」がさらに身についたかもしれない。

最後に、受け入れ部署外の人々とも公私ともに交流していたようで、人脈の作り方も学べたのではないかなと思う。優秀な学生であった。

まとめ

2か月という期間が、成果を出す上では少し短いという感覚は、学生・受け入れ企業ともに感じるものであった。

受け入れ企業は大学との交流が深まったことを喜ぶ一方で情報コンタミを懸念している。

協議会のインターンシップのフォロー体制に対して学生は満足している。

インターン実習生・・・九州大学大学院システム情報科学府 情報学専攻（男性）
 実施テーマ・・・・・・・・放送通信連携による番組関連情報検索機能の開発
 受け入れ企業・・・・・・・・三菱電機株式会社 先端技術総合研究所（兵庫県尼崎市）
 実施期間・・・・・・・・2015年8月17日～9月18日（1か月間）

■参加動機と事前準備

企業におけるシステムの開発方法や、進捗、品質管理を学ぶとともに、グループ・ミーティングや複数人によるシステム開発を経験することで、情報共有や共同開発の仕方を学ぶことを目的に参加した。事前に企業担当者の方とミーティングし、研修で開発するシステムについてイメージ合わせをした。

■実施後の自己評価

基本システムとして画像転送・補正システムを開発したのち、応用システムとしてユーザの嗜好に合わせて反応するスマートテレビ向けウェブ・アプリケーションを開発した。全体を通して、データベースを用いた進捗・品質管理方法やウォーターフォールモデルを用いたソフトウェア開発を学び、マイルストーンの設定方法や仕様書作成とレビューの仕方の知見を得た。またプロジェクト型ということで、他の院生との共同開発に際しては、仕様書の重要性や情報共有の大切さを実感することができた。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

研究所メンバーにない技術と視点を備えた学生と話し合いつつ開発することで、既存の保有技術と異なるものを取得でき、受け入れて良かった。またアイデアMTGや最終報告会では、より大学の研究に近い議論もでき、グループ全体に良い刺激となった。他方で、学生が事前に描いていた計画と当社から提示した課題や要求とのすり合わせが難しく、もう少し事前に相談ができていたと良かった。事前の計画や保有技術にこだわり過ぎず、それ以外のものにも手を広げることで、更なる成長が期待できると思われる。

今回は同時期に参加した別の学生と連携したプロジェクト・チームを組んで開発を行ったが、その難しさやノウハウ等を聞いたのは今後の参考になった。また1か月という期間も、プロジェクト型インターンシップを遂行するのに丁度いい期間だった。

■その他

【後輩の方に】実際の職場の雰囲気を感じることができ、進路を決めるうえで大きな判断材料となるので、インターンシップに参加することをお勧めしたい。

まとめ

学生は、一つのテーマに複数人で挑むプロジェクト型インターンシップに参加した。正確な仕様書や情報共有の重要性について知見を得た。

インターンシップ・テーマ選定に際しては、学生の意向と企業の対応可能な範囲を擦り合わせるため事前ミーティングを実施した。

学生は、進路選択の重要な判断材料となったと感じており、後輩にも参加を勧めている。

プロジェクト型は、今後ノウハウの蓄積が進むにつれて、より実地的なモデルとなり得る。

インターン実習生・・・九州大学大学院理学府 化学専攻（男性）

実施テーマ・・・金属焼結体の緻密度が、機械特性（引張強度）及び熱的特性（熱膨張率）に与える影響の評価

受け入れ企業・・・三菱電機株式会社 先端技術総合研究所（兵庫県尼崎市）

実施期間・・・2015年10月13日～11月13日（1か月間）

■参加動機と事前準備

企業での材料試作や評価研究と自分が学ぶ基礎研究を比較し、研究の推進方法にどんな違いがあるかを学べると期待して参加した。これまでの研究を企業で活かすために必要となることを見極めようと心がけた。事前に文献を通じて基礎知識を学習するとともに、自分の研究内容を整理した。これは、テーマが自分の研究と離れていたこと、研究報告をする機会があるかもしれないと考えたことによる。

■実施後の自己評価

低熱膨張材料の焼結体試料を複数作成し、緻密度、機械特性、熱膨張特性の評価などをグループ内で議論した。一連の研究開発過程を経験し、各場面で必要とされる技術を知った。また、研究所内では他部署、他事業所を巻き込んで積極的な相談と議論がされており、これが企業の研究を推し進める原動力であると気付かされた。研究の応用可能性を考える上でニーズに対する視点を備える必要あり、今後の研究で目を配りたい。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

材料という共通項はあったものの、専門外の研究内容に積極的かつ前向きに取り組んでもらえたことは良いことだった。金属粉体を秤量しプレス成型、焼成した試作品を評価、解析するという一連の作業を、特に問題なく、怪我なくこなしたことは良かった。汚れ作業を厭わず率先して作業に加わるとともに、その後の調査作業、資料作成といったデスクワークも無事こなし、素朴な疑問を投げかける姿は好印象だった。一点残念な点は、1か月という期間が短すぎるように思われた点である。期間をもう少し長くともってもらえた方が良かったかもしれない。

企業の研究開発と大学の研究との違いの一端と、企業で必要となる要素の一部でも感じてもらえたならば、十分有意義な経験だったといえるだろう。

■その他

【企業への要望】自身のプレゼンテーションの改善のためにも、社員の方の発表を聞く場を何回か設けて頂けると嬉しかった。

【大学への要望】インターンシップ、学外研究といった長期にわたり大学を離れる機会に対して柔軟に対応できるようなカリキュラムを整備してもらいたい。

まとめ

短期間ながら、一連の生成、評価、解析プロセスに携わることで、自分の研究に企業の研究開発を取り込むという、学生、企業双方が望んだ成果を得ることができた。

前向きかつ自発的な研修生の態度は評価が高く、もう少し学んでもらうためにも長い研修期間を受け入れ企業が希望するほどだった。

学生の要望としては、企業研究者の報告を聞く機会が欲しいとのことである。大学のカリキュラムの柔軟化が必要である。

インターン実習生……九州大学大学院総合理工学府 環境エネルギー工学専攻（男性）
 実施テーマ……医療ヘルスケア分野における、「空間」の新たな価値を
 文理融合の視点からとらえた新規ビジネスモデルの提案
 受け入れ企業……ダイキン工業株式会社 テクノロジー・イノベーションセンター
 （大阪府摂津市）・九州大学筑紫キャンパス
 実施期間……2015年10月5日～12月25日（3か月間）

■参加動機と事前準備

文理融合的な視点から新価値を捉え、新規ビジネスとして提案するという本研修の課題は、従来の短期職場体験型とは一線を画すものであり魅力的なものであった。未来の社会的リーダーへと成長するために必要な、新価値提供能力を養うことを目的に参加した。事前準備としては、社会に対する幅広い知識を仕入れるために読書に力を入れた。

■実施後の自己評価

専門とは異なるテーマに取り組んだ結果、常に新鮮な気持ちで課題に取り組めた。個人の関心にとどまらず、社会の結びつきを常に意識するなど、一人の研究の枠を大きく超えている企業での研究プロセスに触れることで、大学と企業の研究プロセスの相違を理解できた。民間企業の新規ビジネスの構築プロセスを学ぶとともに、未来社会の予測、バックキャスト等を通じた、長期的視点での戦略立案能力を鍛えることができたのは、収穫である。新しい気づきとしては、異分野の方々との交流を通じて、イノベーションの素地について考えることができた。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

テーマにビジネス企画を盛り込むことで、博士人材活用に関する社内での議論を起こすことができたこと、そして初めてサテライト型を導入することで長期インターンシップの可能性を広げることができたこと、これらは今回の成果である。反省点としては、2か月間の期間では、企画立案に際して当社がもつ周辺技術探索、当社とのシナジーといった点に至るためには時間が足りなかったこと。またWeb会議は当初予定の2週間ごとでは不十分だったため、1週間毎の頻度にした。期間や、会議の頻度、技術者へのヒアリング等プログラムの最適化が今後課題となるだろう。設定した時期の未来予測から社会課題を設定し、現状とのギャップから企画案を提示した点は非常に高く評価された。あえてレジリエンス・ビジネスを選択した点も秀逸で、役員も高く評価していた。深掘りには、もう少し期間が必要だった。

■その他

【後輩の方に】自身のキャリアプランを再考するための参考にしてもらうとともに、読書を通じて過去・現在・未来を知り、社会の需要、自身の力の活用可能性に思いを巡らせて欲しい。

まとめ

学生の分析手法と着眼点は、受け入れ企業役員も着目するものであり、大きな成果を出したインターンシップであった。他方で時間的制約から、ビジネスモデルの深掘りができなかった点は、学生・受け入れ企業ともに、悔やむところである。

インターン実習生……九州大学大学院数理学府 数学専攻（男性）

実施テーマ…………… WAVEファイルにおける音の発生と変化の検知によるテンポの解析

受け入れ企業…………… ローランド株式会社（静岡県浜松市）・九州大学伊都キャンパス

実施期間…………… 2015年6月29日～10月2日（3か月間）

■参加動機と事前準備

将来を考える上で、企業での研究開発を知りたいと考えた。アカデミア外で専門を活かす方法があるのではと思い、学生時代に産業の最前線を知ることが、研究の動機付けと進路選択に生きてくると思いを参加した。そして数学の可能性を知りたいと感じた。受け入れ先選定に際しては、自分の関心を一番惹く企業を選び、課題は受け入れ部署の技術部長と事前に打ち合わせ、決定した。音楽の知識の復習や信号処理に必要なフーリエ変換やウェーブレット変換の知識を独学で学んだ。

■実施後の自己評価

サテライト形式で、研究の大半は大学で行った。短期間ではあったが、コストや利益などの側面が理解でき、当初の目的は達成できた。与えられた課題解決の端緒は得られたが、実装段階に至るまではまだ遠く、今回の成果を足がかりに発展が望まれる。反省点は、週報や月報の作成に時間をかけ、肝心の研究が疎かになる時があったこと、学内の研究者とのコンタクトを遠慮してしまったことである。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

今回は、弊社の基礎技術部門が未解決とするテーマを設定した。短期間のため、当初は成果創出に対する期待値は低かったが、学生の着想に基づく新しい試みがなされ、弊社技術者にとっても視野拡大の機会となった点は特筆すべきである。同時に、数学が弊社の基礎開発にとって強力な武器になることを再認識した点も有意義だった。今回はサテライト方式を採用した。大学内における個人研究のスタイルを主とし、週1回のスカイプ面談、月1回の弊社訪問で人的交流を図った。サテライト方式を採用した理由は以下3点である。

1) 本人負担の軽減

2) 大学のリソース活用

3) 常駐による労務管理負担が企業内に発生しない

秀逸な研究成果を見る限り、マイナス面を補って余りあるメリットがあったと考える。

■その他

【後輩の方に】抽象理論研究を専門とする院生にとって、専門をそのまま活用するのは難しい。期待されるのは専門性より思考能力と学習能力かもしれない。その際、強みとなるのは興味関心の強さと、身につけた地力である。産業数学と縁がないと感じている方も、分野を問わずインターンシップを通して視野を広げてみることをお勧めする。

純粋学問としての数学の応用可能性が示された点で、学生にとって実り多いインターンシップだった。現在、受け入れ先企業は大学との共同研究の可能性を模索中である。

サテライト型を用いることで、多くのメリットが学生、受け入れ先にもたらされたが、それは何より受け入れ先の適切な課題設定と研修生の素養および努力によることが多く、同形式の導入にはリスクもあることを念頭に置く必要がある。

インターン実習生……九州大学大学院工学府 化学システム工学専攻（女性）

実施テーマ……………高精度ゲノム解析技術の開発と植物育種への応用

受け入れ企業……………会員外企業（愛知県名古屋市）

実施期間……………2015年10月1日～12月11日（2.5か月間）

■参加動機と事前準備

公共性や安全性、利益を目的とする会社組織の理念、システムを学び、企業における研究のあり方を知りたかった。大学で培った研究技術と思考方法で、異分野の研究にどこまで挑めるのかを確かめられる環境を期待した。

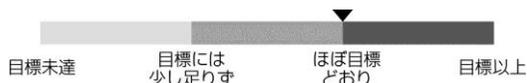
事前に受け入れ部署が共著者として加わった論文を読み、情報を集めた。コーディネーターのフォローを受け、一般常識やマナーを学んだ。最後に電話会議によってテーマ選定の方向性を決めた。

■実施後の自己評価

導入教育や実習中の諸注意を通じ、企業のルールや理念、対応方法を学べたのが成果だった。個人の意思に依存する大学と異なり、企業では構成員全員が規定遵守を基本とし、安全性と秘密保持、品質管理を徹底していることに気づいた。利益やコストを考慮するという視点、工場と同一の基準で、だれでも均一に研究できる工夫をこらした研究室などは新鮮だった。研究開発の場では、新規基礎技術を検討し、最初に設定した実験目標を達成した。

定時退社を前提とする研究に馴染む努力が必要だった。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

学生の真摯な研究態度によって職場の意識に変化が出た。また、他分野で培った知見を業務に反映してくれたことで、異なるアプローチのイメージを共有できたのは良かった。新手法を正確にトレースしてもらえたことで、同法の可能性を改めて確認することができたことは収穫である。

学生の素質が優れていたため、インターンシップの運用そのものがスムーズとなった。また、研究実務自体で価値が得られたのは大きかった。

学生はすでに博士号取得に目処が立っており、指導教員の理解もあったため研修に専念頂けたが、研究の進捗や進路選択に不安がある学生の場合、職務に専念できないという可能性があり、また指導教員も積極的な了承を与えないのではないかと懸念している。

■その他

【先輩の方に】新たな世界・異分野に挑戦する機会を得ることで、考え方や視点が柔軟になるとともに生活力がついた。大学・企業どちらの道に進むかを問わず、大変良い経験となるだろう。

学生は既に博士号取得にメドをつけた院生で、結果的に余裕をもって研修に専念することができた。

優秀な院生にとっても、企業での経験は学びに満ちていた。



インターン実習生・・・九州大学大学院システム生命科学府 システム生命科学専攻（男性）
実施テーマ・・・・・・・・ 医療ヘルスケア分野における、「空間」の新たな価値を
文理融合の視点からとらえ、新規ビジネスモデルの提案
受け入れ企業・・・・・・ ダイキン工業株式会社 テクノロジー・イノベーションセンター
（大阪府摂津市）・九州大学伊都キャンパス
実施期間・・・・・・・・ 2015年10月5日～12月4日（2か月間）

■参加動機と事前準備

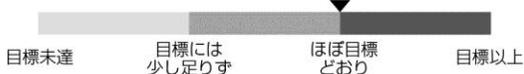
企業における博士人材の活躍の場を知るとともに、博士人材が抱える課題を知ることを目標とした。

目標の達成過程で、自分の能力と欠けている側面を把握し、将来社会で活躍する方法を考える契機を得ることを期待した。企業の研究開発の現場を知り、その知見を自身と研究室の研究にフィードバックできるのではないかと考えた。事前準備としては、ビジネスマナーの習得とテーマである新規ビジネスモデル提案の元となる案及びアイデアを検討し、モデルの候補を可能なかぎりリスト・アップした。

■実施後の自己評価

経済活動の知識は殆どなかったが、考案手法を用い、新ビジネスの企画まで辿り着いた。既存データを調べ適切な情報を得る力や、分析力、資料まとめ、プレゼンの能力等研究で培った様々な能力と経験とが活きることを実感した。提案したモデルは好評をいただいたが、受け入れ先が検討していた既存のアイデアの範疇を越えてできなかったことが自身の課題である。

■事前目標の達成度



■実施後の他者評価

◆受け入れ企業担当者から

テーマにビジネス企画を盛り込むことで、博士人材活用に関する社内での議論を起こすことができたこと、サテライト型を導入することで長期インターンシップの可能性を広げることができたことが、今回の成果である。反省点としては、2か月間の期間では、企画立案に際して弊社がもつ周辺技術探索、弊社とのシナジーなどに至るためには時間が足りなかったことである。またWeb会議は2週間毎では不十分だったため、1週間ごとの頻度にした。期間や、会議の頻度、技術者へのヒアリング等、プログラムの最適化が課題となるだろう。空気・空間創造という弊社が目指す方向性を的確に捉え、今後の社会の課題という観点から、魅力ある企画案を提示した点は高く評価できる。具体的提案までの深掘りには、もう少し時間が必要だった。

■その他

【企業への要望】サテライト型の性質上、社員の方と話す機会が少なく、企業見学をプログラムの中に組み込んで頂けたら良かった。また、乏しいビジネス知識を補うための、課題図書や宿題が事前にあると良かったかもしれない。

【大学への要望】インターンシップの時期や期間などのハードルを下げたり、単位認定や成績への組み込みなどを検討して欲しい。

まとめ

サテライト型で新規ビジネス企画立案を扱うインターンシップで、研修生提案のモデルは高評価を受けた。博士人材の社会活用という点で、学生・企業双方に示唆的な事例だった。

サテライトの実施形式や期間設定、事務処理方法などプログラムの最適化が双方より求められている。